

# 特集「イスラームの社会・文化・宗教」

Theme: Islamic Society, Culture and Religion

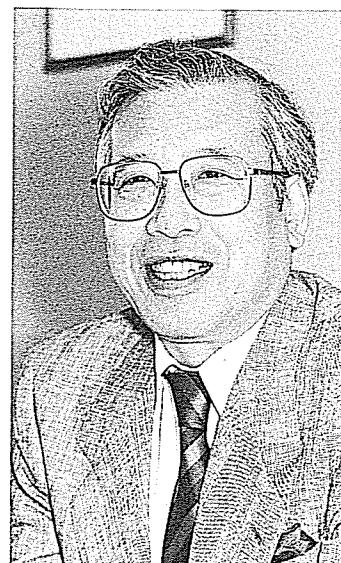
■対談

## イスラム教における「聖」と「俗」

板垣雄三・中村廣治郎

### 「イスラム教の特質」について

中村 この対談のテーマは、イスラム教における「聖」と「俗」ということですが、この問題は「政」・「教」といった制度的次元の問題などとも一緒に議論されていて、少し混乱がありますね。また、「聖」と「俗」というのは、どの宗教にも共通する概念としてあります。例



板垣雄三氏



中村廣治郎氏

えばドイツの宗教学者ルドルフ・オットーは、宗教の本質として「聖なるもの」を挙げています。そして、その本質的な要素をヌミノーゼ的なものとして分析しています。それからデュルケームというフランスの社会学者も、やはり「聖」なるものを宗教の本質としています。これは「不可侵なもの」として、「俗」なるものから区別し隔離されたものと考えているわけですね。それから最近ですと、宗教学者のエリアーデも「聖」と「俗」を立て、「聖」なるものの現象を宗教の本質的なあり方としてとらえている。

日本でもハレとケという分け方が民俗学に從来からありますね。「れも」「聖」と「俗」とみていいと思いますが、「ハレ」すなわち「聖」なる時間・空間ということになります。「ハレ」はやがて「ケ」＝「俗」なるものへと移行していくわけですね。「聖」なる時間、「聖」なる場所において「聖」と交わる体験を持つことによって、それが「俗」なる生活の中でのエネルギーとして大きな力を持つてくるというように考えられます。

そういう意味では、「聖」と「俗」という区分はイスラ

ムの場合もあります。例えばメッカ巡礼の際に、「俗」なる状態から「聖」なる状態に入るという特定の時間と空間というのがありますね。そして、そのことをイフラームという巡礼衣の着用によって象徴的に表します。また、爪や髪を切ったりとか、性的交わり、狩猟など「俗」なる生活の状態においてできる」とが、「聖」なる状態ではできなくなるわけですね。巡礼の期間は、そういう状態で過ごすわけです。そして一種の聖体験というか、そういう高揚した充電体験を経て、巡礼の期間の終了と共に、俗なる生活に帰っていくわけですね。

最近の日本の民俗学では、ハレからケ、ケからハレになりますね。これも「聖」と「俗」とみていいと思いますが、「ハレ」すなわち「聖」なる時間・空間ということになります。「ハレ」はやがて「ケ」＝「俗」なるものへと移行していくわけですね。「聖」なる時間、「聖」なる場所において「聖」と交わる体験を持つことによって、それが「俗」なる生活の中でのエネルギーとして大きな力を持つてくるというように考えられます。

なるわけですが、ケからハレの間にケガレ（汚れ）といふことを考えますね。つまり、ケの状態がだんだん枯れてきてエネルギーが無くなり、ケガレになるという、三つの概念でとらえるわけですね。そして「聖」なる状態に入つてもう一度「聖」なるものとの交わりによって、生活を意味あるものに活性化していくというダイナミズムをもつてているわけです。そういう意味では「聖」と「俗」という区分はイスラムにあるのではないですか。

板垣 今の中村さんの話にあつたような意味では、「聖」と「俗」の立て分け、移行、循環は、イスラムの場合にも、確かにあると思う。大体宗教一般にあるという場合はそうですが、しかしその場合の「聖」と「俗」の分け方について、例えばキリスト教とイスラムの場合を比較して違いがあるとすればどこか、あるいはハレとケというような、日本における宗教観念とか宗教意識からみた「聖」と「俗」の区別と、イスラムにおける「聖」と「俗」の区別の比較というような、そういうことでは何か言えることはありますか。

中村 日本との比較で言いますと、ハレとケという空

「聖」というものがある、何かそういうところがイスラムの特徴としてあるというようには言えませんか。

中村 それはたしかに言えますね。一つ考えられるのは、いわゆる「俗」なる行為、つまり現世的な行為であつても、その人がその行為をどういうふうに意味づけるかということで、それは「聖」なる行為になつてくるのですね。その逆もまたしかりですね。そういう点で、仏教なりキリスト教なりの場合には、日常生活の次元ではなくなかなか「聖」が外に出て来ないという違いはあります。ところがイスラムの場合には、具体的な行為規範（シャリーア）としてあるわけですから、その規範の中に「聖」なるものが表現されているわけですね。つまり、その行為規範というのは「聖」なるものに由来するわけですから。しかし、本来は「聖」なる規範なんだけれども、ルーティン化されて「俗」なるものに転落していく危険性を常に持つていていますね。また人によっては「聖」なる行為とされているものでも、全く「俗」的な目的でなされる場合も同じです。このように「俗」と「聖」の間というのは紙一重です。ですからイスラムの場合で



対談中の両氏

間的時間的な聖・俗の区別、特に祭りの場合にはそれがはつきりしていますね。イスラムの場合は、たしかに巡礼とか、それから断食明けの祭り（イード・ル・フィトル）とか、それから犠牲祭（イード・ル・アドハー）、これは巡礼の最後の日に行なわれる祭りですが、その祭りは全世界のムスリムが祝うわけですけれども、そういうものはやはりハレと共通する部分としてありますね。

しかし他方では、イスラムの場合、「聖」が「俗」のなかに聖法として制度化されているという側面が強いといえるかも知れません。サラート（礼拝）は別にしても、例えばザカート（喜捨）ならザカート、それから婚姻とか、そういう人間の日常生活の中にそのまま聖なるもの（聖法）が入っているということがもう一つの特徴としてはいるのでないでしょうか。

板垣 宗教全般を概括することはできないでしょうが、一般に他の宗教に比べて言えば、「聖」と「俗」というのはたしかに別々のものとしてあるのだけれども、その「聖」なるものが現実の中でたえず問題にされ直すというか、現実の中にたえず突っ込まれてくるような

も、巡礼とかサラートとかの特別なハレの機会によって、ルーティン化しケガレた日常生活を活性化する必要が出てくるのでしょうか。

板垣 宗教学の本来の議論の仕方からすれば非常に素人論議みたいなことを言うようですけれども、やっぱりある種の聖別というか、聖俗を分離したいという気持ちがどこかで働いているということが一般的にある中で、イスラムの場合にはむしろ分離よりは、適当な言葉は見つからないけれども、さつき突っ込んでいくといったけれども、むしろ一体化というか、合体する中で何か「聖」なるものが実現されるような、そういうようなことがあるとは言えませんか。

中村 たしかにね。

板垣 「聖」と「俗」を切り離そうという、そういうことがあんまりないんじゃないですか。むしろ現実そのものの中に「聖」なる時間なり空間なり行為なりが実現される。

中村 具体的な行為規範としてはですね。それがイスラムの特徴じゃないかと思います。

板垣 そういうふうに考えると、国家と宗教とか、政治と宗教といった、そういう問題のたて方にに対するイスラムの立場が、またはつきりしてくるのではないかなどいう気がするんですが。

中村 そうですね。イスラムにおける国家と宗教、政治と宗教といった問題は、制度的な面と前に述べた「聖」と「俗」の面の二つに分けて考えられますね。まず、前者については、政教一致ということがよくいわれます。これは、そもそもの発端と関わってくる問題だらうと思います。ただこれについてはいろんな議論がありましてね。たしかにイスラムが生まれた時の状況というのは、国家という大きな組織はなかったわけですね。イスラムと同時に生まれたのはコミュニティです。いわゆる宗教共同体（ウンマ）というのができて、それが一つの国家的な組織を持ってきたということですね。ムハンマド（マホメット）はそういう共同体の中で神の啓示を伝える預言者であり、またいろんな宗教的政治的な問題についてもアドバイスし支配する宗教的政治的な指導者でもあった。ムハンマドは共同体の中で、言わば三つの役割

をもつた指導者であったわけです。そしてムハンマドが死んで預言者としての役割が終わるわけで、彼の「後継者」としてのカリフは、宗教的・政治的指導者としての預言者の役割を引き継いだわけですね。こうしてイスラムの宗教共同体（ウンマ）は国家となり帝国となっていました。その際、カリフたちは預言者がどうしたか、神のメッセージにはどういう指示があるのか、ということを手掛かりにしたわけですね。

しかし、「聖なる」規範はやがて日常化し、ルーティン化すると「俗」の状態に変質していく。これが第一の面です。シーア派にしろ、ハワーリジュ派にしろ、反体制運動はそのような政治の俗化に対する抵抗運動とみることができるのではないでしょうか。

板垣 メディナにおいて一つの共同体が、預言者のもとに形成されて以降、その周辺には東ローマ帝国とか、ササン朝のイラン人の国家とか、そういった巨大帝国が一つの圧力をもつた存在としてあったわけですね。そうした国家と、どういうふうに自らを区別したんですかね。国家としての次元で言うと……。

中村 例えば東ローマ帝国、ビザンチン帝国の場合は、キリスト教の皇帝ですから、キリスト教の位置づけと絡んでくると思いますね。ササン朝の場合は世俗的な国家（ムルク）と考えていたのでしょうかね。イスラムの伝承によれば、東ローマ皇帝とササン朝ペルシャ皇帝へ使節を遣わして入信を求めたということがいわれていますね。それはやはりイスラムという神からの最終的なメッセージを伝えるウンマ（イスラム共同体）と考えたんじやないでしょうか。

板垣 つまり、その回りにすでにあつた国家群もやはりある種の宗教共同体であつて、ということはつまりメディナに生まれたウンマ、すなわちイスラムの宗教共同体も、回りにある国家群とちゃんと同じ政治の次元でわたりあつて、そういうものでもあろうと覚悟していたという、そういうことでしょうかね。

中村 そうですね。

## 一、預言者ムハンマドの役割

板垣 さつきの中村さんの話を聞いて、一般に分かり

にくいのではないかと思うのは、「預言者」という問題ですね。預言者がもつてているいろいろな機能が国家形成にどうつながっていくのか、そのところをもう少し説明してもらつた方がいいのではないか。

中村 預言者ムハンマドをどう理解するかについて

は、いろいろ議論がありますね。政治指導者の側面と宗教指導者の側面を不可分な本質的なものとしてとえらる

見方と、そうではないという意見と、大きく分ければ二つあります。もちろん、前者が伝統的な多数意見ですが。

国家と宗教が不可分であるという立場は、神の啓示は、人間に対する導きであり指針である、神からのメッセージである以上、それは一番正しく、一番信頼できるものであるから、それなら日常生活における指針はできるだけそこに求めるということになりますね。そもそも世界・宇宙を創造したのは神であり、またその直接的支配者・主権者であるということに始まります。その前提がない限り、預言者というものは意味を持つてこないわけです。もし神がそのような創造者であり、世界・人間・歴史というものを支配している、そういう神である以上、

人間がいくら理性でこれが正しいと思っていても、その神がそのように考えてくれなければ、これはもうどうにもならないわけです。そこで神は人間にに対する恩恵として、預言者を遣わして「導き」としての啓示を伝えさせたといわれます。

板垣 人間の行為のみならず、移りゆくその「時」まで、神によって創られているということでしょう。

中村 そうです。だから一番信頼できるものは何かといふと、神が語った言葉である。たとえ神が全知全能であって、何でもできるといつても、自分が語った言葉を裏切るというようなことはあり得ないわけですからね。そういう神の言葉を伝えるもの、それが預言者です。これはキリスト教にもイスラム教にも共通していて、旧約聖書から続いているものです。

それでは、誰が預言者であるか、あるいはどういう預言者がどういう性格を持っているかということになると、ユダヤ教、キリスト教、イスラム教の間に違いが出できます。イスラムではムハンマドが最後の預言者である、つまり預言者たちの「封印」であるという言い方を

しますね。イスラムの立場からすれば、同じ預言者といつてもイエスはムハンマド以前のものである、モーセはもちろんそれ以前ですから、そういう意味ではある種の「啓示の発展」ということは認めているわけですね。イスラムで最終的な段階に達したというようにいいますね。五七年頃に生まれたムハンマドが、六一〇年頃に最初の啓示を得て、そして六三三年に亡くなるわけです

が、その間ずっと二十余年間啓示が下されるわけですね。六二一年にメッカからメディナへ移って、そしてメディナという町で独立した一つの自立的な宗教共同体を作ります。その間啓示は時の状況に応じて下された。その啓示が神からのメッセージであり、それを集めたものがコーランになるわけですが、それが一番確実で信頼できる。ですから何事においてもコーランに従つて行動すれば一番安心だということになります。そこでは国家の問題も経済の問題も区別がないわけですね。コーランによれば、人間の歴史はやがて終末を迎え、そして裁かれる。その裁きの時に何を信じ、どういう行為をしたかという

ことで裁かれるのですから、人間は生きている間正しい

行ないをしなければならない。その場合、何が正しくて何が一番信頼できるのか、どういうことをすれば裁きの主である神の目から見て正しい行為になるかということが一番問題になるわけです。

板垣 その預言者を通じて知られた神の意思、命令というものが、現実の中での人間の生き方とどういうふうに結びついているかについては、今の説明で分かりました。その次の問題としては、やっぱり一般に分かりにくいのではないかと思うのは、例えばこの預言者という存在と、それから他の宗教における聖職者との違いついふうか、そのところもはつきり説明してもらうとイスラムにおける国家と宗教というものの関係がはつきりしてくると思いますが……。

中村 イスラムには聖職者はいないということがよく言われます。特にキリスト教などとの対比の上で、イスラムには聖職者はいないということがよく言われます。外部の研究者が言う場合もあれば、内部のムスリムが言う場合もありますね。ただ、これにもいろんなレベルがあると思うんですね。つまり、イスラム内部の神学的な

問題として、聖職者というものを認めるかどうかという問題と、それから社会学的なレベルで聖職者集団があるのかないのかという問題があります。いろんなレベルで考えていかなければならないと思いますね。

そもそも聖職者とは何かということが問題になります。

かりに神と人間の関係をとりなす、そういうファンクション（機能）を持った存在である——例えば日本の神道における神官とかキリスト教における司祭とか——

要するに、神に代わって罪の赦しを与え救いを保証する、そういう機能を持った存在と考えれば、イスラムにはそういう存在はありません。神に代わって人間の罪を赦す者という、そういう意味では、イスラムには聖職者ははないということになります。しかし、宗教上の問題についての専門家、プロフェッショナルな人間集団という意味では存在しますね。それはウラマーと呼ばれています。アーリム（知識をもっている人。学者）の複数形ですね。

つまり、学者集団、具体的には聖法の問題とか神学上の問題とか、そういうことについて専門的な知識をもつて

いる人々、という意味での聖職者は存在します。普通の

人が日常生活をしていく上で、判断に迷うことがありますね。こういうことはしていいのか悪いのか、こういうことをした場合にはどうすればいいのか、というようなことがいろいろ問題になってしまいます。普通の人は専門家ではないですから、基本的なことではない限りは知らないわけです。そういう時にアドバイスを与える人が必要になります。そういう存在を聖職者と呼ぶのであれば、それはいます。それがウラマーですね。しかし、ウラマーはただそういう知識を持っている人ということなんです。もちろん「聖」なる知識ですから、当然その知識を実践する、人格的にも立派で人々の模範になる、というように期待されているわけですね。いずれにしましても、そういう宗教的な指導層はイスラムにも存在します。ですから、仮にそういうウラマーと呼ばれるような人でも、神の命令にそむいて罪を犯したとという場合には、やはり自分で聖法にしたがつて罪の償いをし、神と和解をしなければならない。自分はウラマーだからそういうことは必要ないとか、ウラマーだからそんな罪は犯さないというようなことはない。ですから、聖職者という宗

教的権威や特権を認めないと意味では、イスラムは平等な宗教といえます。

板垣 聖職者のもつ宗教的権威が、國家という次元に展開する場合もあるけれども、社会的な集団形成というレベルでもいろんな教団において問題になる場合がありますね。イスラムにおいては、そういうレベルでのいわゆる聖者、そういう存在についてはどうでしょうか。それも単なる精神的な次元の問題だけではなくに、いろんな社会的な集団形成の軸になつたりしますね。

中村 それはありますね。ただそれは、いわゆるスーザー（神秘家）的な意味での聖者ということですね。ですから「聖者」とはアラビア語ではワリー・アッラー、略してワリーと言いますが、ワリーというのは要するに「アッラーの友達」という意味ですね。つまり、アッラーの近くにいる親しい人という意味です。このワリーが聖者として尊敬されるのは、イスラムの神秘家が神から特別な恩寵を与えられるような特殊な神秘体験をもつた人、特殊な修行を積んだ人、高い境地に達した人だからで、そういう意味では聖なる人間として尊敬されます。

もっとも、例えば、イブン・タイミーヤ（十三～四世紀のハンバル派の法学者、神学者）では、ワリーの語には特殊スーザー的なニュアンスというものはあまりなかつた。彼の場合、ワリーとして尊敬されたのは、要するに神の律法に正しく従っている人という意味です。その点では、コーラン的意味により忠実です。しかし、後になると、ワリー（聖者）というとスーザー的な、特殊な能力を与えられた人たちが人々の信頼を勝ち得て、集団形成の核になつたり、そのリーダーになつたりする。例えば国家を作つたりとか、外からの侵入者に対する抵抗運動を指導したりとかというようなこともありますね。

板垣 ここで、預言者と、ウラマー、イマーム、それから今のワリー、そうした存在を整理しておきたいのですが……。

中村 まず、預言者というのはイスラムの場合にはムハンマドで終わりになります。預言者は神からの言葉を伝えるメッセンジャーであります。ムハンマドの場合はただ単にメッセージを伝えるだけではなくて、そのメッ

セージを地上の社会に生かすことに成功しました。単なる預言者というのは「ナビー」と言いますが、ムハンマドはナビーというだけではなくて、ラスール・アッラーである、神の使徒であるという、そういう区別をする場合が多いですね。

ウラマーというのは、イスラムの伝承では「預言者の相続人」であるという言い方がされますね。少なくともスンニ派では、ウラマーは預言者の遺産を引き継いでいるものと考えられています。何の遺産、どういう遺産を引き継いでいるかというと、もちろんコーランであります。スンナでは、スンナとは預言者のモデル、範例ですね。そうしたものを見ています。何の遺産、どういう遺産について研究し、その意味を正しく伝える。それから預言者についての伝承を正しく伝える。また自分達が、その遺産を実践し、実践したものを見る、そういう意味で預言者の遺産相続人である。それに対してワリー、聖者ウラマーと比較して言いますと、ウラマーはこのイルム（知識）を学習して、それを伝える者ですね。そういうのはちょっと違いますね。

ウラマーと比較して言いますと、ウラマーはこのイルム（知識）を学習して、それを伝える者ですね。そういうのはちょっと違いますね。

られる。そういう聖者が死んで墓ができると、一般の人たちはその墓に詣でてアッラーにとりなしをしてもらうということだが、イスラム社会にも広まつていったわけですね。

板垣 イルムとマーリファという二つの「知」のあり方を比較した場合に、それこそ「俗」と「聖」という、そういうふうな説明がそこで成り立つかどうか……。

中村 ということは、つまりどっちかが「聖」で、ど

っちかが「俗」という意味ですか。

板垣 マーリファとイルムというふうに言えば、短絡的に「聖」と「俗」に分けて考えがちですが、実際にはそうはならない。だから、そういうふうにどうしてならないかという疑問には答えておく必要がある。例えばそもそもさつきの説明では、イルムが分別知でいわゆる形式的な知識だという……。

中村 つまり、イルムの方が「俗」で……といふことですね。もしそういうように受け取られたとすれば、ちよつと私の説明が悪かったと思う。形式的日常的という意味では「俗」的なものになるかも知れないけれども、

う意味ではこのイルムというのは、形式的に学習し伝達できる知識ということになります。ところが聖者も知識を持つっていますが、ウラマーのいう知識と違うと言います。聖者がもつていてる知識は、イルムとは言わない。マーリファと言います。マーリファというのは知識としては内容的にはイルムと同じなんんですけど違う。どこが違うかというと、伝聞によってあることを知ると、実際にそれを目撃して知る知識の違いだと説明されます。学習によって得られる知識は伝聞の知識です。それに対してもアーリファは直接神から与えられた知識であるというのです。ですからこちらの方が上位にある。そしてそのウラマーの知識を確証するもので、それと矛盾するものではない、ということを言います。スーアフィーのいう知識というのは、いわゆる直観知です。例えば仏教でいう分別知に対する般若知ですね。そういう二つの知識というのは何もイスラムだけではなくて、エピステーメーに対してグノーシスとか言って区別されますが、そういう知識ですね。そういう知識を持っている。だから自分が本當は偉いのだ、神の近くにあるのだ、と考え

しかしもともとは「聖」なる存在から出ているわけですからね。イルムとは、神がムハンマドを通して下した啓示及び使徒のスンナについての知識のことですから、本来「聖」なるものもあるわけです。したがって、人はそのような聖なる知識を学び、それを実践して聖なる生活をしなければならない。しかし、現実にはそれは容易に「俗」なる知識に変質する。そして、スーアフィーたちはイルムは俗化したと考えたのですね。そこで彼らは「聖」なる知としてマーリファをもつてきました。結局、マーリファというのは直接全人格をもつて神の唯一性を悟得する直観知をいうわけで、そのルートの違いをたどっていくと、どっちが「俗」でどっちが「聖」ということはいえないと思います。分別知を理性的知識とするなら、確かにそれはイルムではありませんね。そこにまた、前に述べた「聖」「俗」のダイナミックがあると思います。

話を戻しますと、ウラマーについてイマーム。これはシーア派のイマームですが、イマームというのは何かといふと、これはもともと言葉としては「指導者」という意味です。ですからスンニ派でもイマーム、すなわち

指導者はいるわけですが、スンニー派の場合には通常カリフと呼ばれています。シーア派の「イマーム」はスンニー派でいうカリフとはちょっと性格が違いますね。「アフル・ル・バイト」と言いまして、「アフル」というのは人々、「アル・バイト」というのは特定の家ですね、もちろん「預言者の家」という意味です。ですから「預言者の一族の人々」、そういう人たちがイマームになる資格をもつということですね。シーア派では、預言者ムハンマドの跡を継ぐべき者は、預言者の娘婿であり、従兄弟にあたるアリーであるとします（預言者の息子は皆早死にしましたから）。アリーが預言者の後継者として指名され、ウンマを指導するというのです。そのアリーのあとにその子ハサン、フサインと続くわけです。もとも、別の系統のシーア派もありますが、シーア派も分派によってその系列は若干違いますけど、そうしたシーア派の中には、一番有力な宗派が十二イマーム派です。この派ではアリーを初代のイマームとして十二人のイマームが認められています。そして十二番目のイマーム

が八七四年にお隠れになつた。それをガイバ（イマームの隠れ）といいますが、ある日突如としてみんなの視界から姿を消した。しかも現在もまだつと生きていて、やがてマフディー（救世主）として再臨するという。キリスト教のイエスの再臨と同じですね。

この十二人のイマームには、神から特殊な「イスマ」つまり不可謬性、無謬性という特質が与えられている。そして共同体の宗教・政治両面の指導者として認められています。ですからシーア派ではこのイマームたちの言動、つまり言葉とか行為は預言者のそれと同じ権威をもつて受け取られています。ですから、スンニー派では、スンナといえば預言者のムハンマドの範例のことですが、シーア派では預言者ムハンマドのほかに十二人のイマーム、それからアリーの妻でムハンマドの娘のフアティマの言行もその中に加えられます。そういう意味ではシーア派でいうイマームというのは、普通の人間とはだいぶ違いますね。ですから、イマームとは何であるのか、どういう性格のものであるのかということで、シーア派はさらに細かい分派に分かれると言えます。極

端派のことをグラートと言いますが、そういう人たちの考えによると、もうイマームは限りなく神に近くなつていきます。例えば、レバノンのドゥルーズ派はシーア派のなかの極端派の一派ですが、この一派はファーティマ朝第六代カリフのハーキム（在位九九六—一二〇二）を「最後のイマーム」とみなし、アッラーの化身であると考えます。

### 三、イスラムの「法」と「指導者」

板垣 ともかくイスラムにおける「聖」と「俗」といふのは、なかなかに簡単ではないですね。しかしながら同時に預言者を通じて与えられた神の言葉というものを現実の中にどう生かしていくかという、そういうところにおいては、やはり他の宗教の場合に見られるような、神と人間を仲介する中間的な聖職者というのは、比較的に出てきにくいというか……。

中村 イマームがそれに近いかも知れませんが、まあ十二イマーム派の場合には今いないわけですからね。結局、その代理がやはりいなければならないという

ことになりますがね……。しかし、厳密には神学的意味の聖職者は出て来ませんね。

板垣 知識の力で代行するわけですか。

中村 そうですね。ですからシーア派の場合には、スンニー派と違って、イマームが不可謬な知識の保持者として宗教指導者であり、本来の政治指導者でなければならないわけですね。ところが、イマームがいないわけですから、結局シャーと呼ばれる君主が出てきますね。ところが、イマームの代理人としてウラマーが発言権を持つて来ますと、君主をどう位置づけるかというのはなかなか難しくなるんですね。スンニー派の場合には、ごく早い時期からカリフとウラマーがあつて、現実にはそれぞれ一種の分業をするようになる。つまり法解釈はウラマーが行ない、それを実際に政治の中で生かしていくのがカリフであるということですね。しかし、歴史とともにカリフがだんだん実権をなくしてくると、今度はスルターンとかアミールという、いわば武力で成り上がったものが政治の舞台に出てくるわけですね。そういう人々はイスラム法的にはそれ自体何らの正当性も権威もない

いわけです。イスラム法的に正当化された政治指導者というのは、あくまでもカリフですから。日本でいえば朝廷の実権が衰える。そのあと征夷大将軍が出てきて、幕府を作ったりしますね。その將軍がだんだん権威がなくなってきて、下克上になってしまいます。しかし、日本と同じように、イスラムの場合もやはり戦国大名はそれだけでは全国を制覇できる権威はないわけですね。やはり聖なる存在としてのカリフの委任がなければならないわけです。大体そういうふうな関係がカリフとスルターンやアミールの関係であつたと言つていいと思います。

シア派の場合は、イマームが本来の政治指導者であります。しかし、そのイマームが不在である。そうすると結局誰が政治の実権を握るかというと、実際にはシヤー、君主です。シヤーも王朝によつてその性格は違いますが、それ自体にはイスラム法的権威がない。イマームが本来もつている権能を仮に実行しているだけである。他方、イマームの後継者としてのウラマーにも政治的権威はある。ですからウラマーがその政治的権威を主張するようになると、シヤーの権威と衝突し、シヤーの

地位は非常に不安定になりますね。そのあたりがイランのイスラム革命で明確に出てきたのではないかなと思います。

板垣 そこで、次の問題として、シャリーアについて整理しておきましょう。神の命令、その実践、履行ということの説明が前提にあると、いくぶん現代の問題につながりやすくなるように思つただけれど。

中村 宗教と政治の問題を考える場合、イスラムではそれは具体的には、イスラム教徒の日常の生活規範になるのがシャリーア、すなわちイスラム法ですから、その内容が具体的にはどうであるかということがポイントになりますが、その内容は、その内なることとは、その内容がきわめて広範で、生活のほとんど全分野を包括するものだということですね。そして特徴的なことは、その内二つに分けられます。一つはイバーダートと呼ばれる儀礼的な規範。つまり、人間が神に対して直接的に負つている義務規範ですね。もう一つはムアーマラートと言われる法的な規範ですね。これは、人間相互の間の権利・義務関係のことです。イバーダートの方はこれは通常「五

柱」（五行）と呼ばれるものが中心になります。それは信仰告白に始まり、礼拝、喜捨、断食、巡礼に至る五つの大きな柱です。これは誰もが日常行なわなければならない規範であります。それに対してムアーマラートは、言つてみれば法的な規範、人間相互の関係を規制する規範で、売買から刑罰、裁判、証言、刑事訴訟、婚姻、離婚、親族関係、相続の問題といった広範な内容を持つていますね。

これら全てはもちろんコーランそのものに書かれているものではなくて、コーランや預言者のスンナ（範例）、具体的にはハディースと呼ばれる伝承ですが、そのようなものとか、その他の要素からウラマーと呼ばれる学者たちがいろいろ苦労して体系化したものなんですね。できあがつたのが大体イスラム暦九〇十世紀ぐらいです。

ですからその頃になつて古典的イスラム法が具体的な形をとつてきたということになる。それがシャリーアです。ただシャリーアの内容が常にイスラムの歴史を通してそのまま適応されてきたわけでは必ずしもないですが、少なくともそれは共同体のモデル、道徳的的理想であると

見られたことは大事なんですね。そういうことで国家の存在理由、レズン・デートルがシャリーアである、シャリーアの適応ということになります。イスラムの側からみれば。つまり、シャリーアには社会的、市民法的規範も含まれているわけですから、これは強制的にでも適応させていかなければならない。そしてそのような社会的政治的秩序を維持する必要がある。そのための機関が國家です。イスラム的には国家というのは、そういうものとして位置づけられてきたんですね。それが近代以降、大分変わつてくるわけですが……。

板垣 今、中村さんから説明のあつたイバーダートも、それはあくまでも神と人間との関係に係わることではあるけれども、やっぱり信仰告白をとつても礼拝をとつて、も、また喜捨や巡礼などに至つては一層、ある種の社会的な展開というか、社会の場で実現される行為として問題とされるわけですね。

だから一番最初から話がずっとつながるわけだけれども、イバーダートはあくまでも世俗を越えた宗教的なもの、ムアーマラートは何か人間同士のこと、それは「俗」

の方の話だとか、そういうふうな分離ということがない。

中村 それはもともと起源が同じですから。ですからイスラム法に則つて財産を相続するのも、礼拝の時にアッラーに跪拝するのも、共にアッラーへの帰依として、規範的には同じですね。同じなんだけれども、その直接的なコンテクトが何であるかというと、一方は人間とアッラーという直接的関係、アッラーに対して直接お祈りしたり礼拝したり、神名を讃えたりということですね。

しかし、もう一方の、例えば婚姻とか売買とか遺産相続というのも、もちろんそれをアッラーの命令通りに行なうということで、それも一つの「聖」なる神の命令の実践ということになるわけですね。しかし、それが真に「聖」なる行為であるのは、純粹に神への奉仕として行なわれる限りにおいてですね。そうでなければ、それは「俗」なる行為になります。特にこのことはイバーダートにおいて問題になります。そこで「聖」なる意図——純粹な意図——によって行なわれるということを確保する一つの形式が宗教上の知恵として生み出されています。それは、断食を始める場合でも、喜捨をする場合にも必ずニーハヤ

ければならないという、そういうダイナミズムが、イスラムにもずっとあつたと思うんですね。その一つの現れが内面を強調するスルフィズムです。しかし、ここにもやはりルーティン化、俗化の危険はあります。このような「聖」と「俗」のダイナミズムが常に宗教を動かしていくいく一つの原動力としてイスラムにもあつた思うんですね。ただたて前論として現象的、制度的なレベルとして宗教がどの程度政治に関わっているかということのほかに、そういう重要な問題が一つあると思うんですね。

#### 四、イスラム国家とは何か

板垣 ウンマというイスラムの共同体における預言者の役割という段階は別として、カリフの時代になつて、カリフとウンマという、そういうものの実態は可変的なわけですね。どういうカリフが実際に存在するかということによつて随分ウンマの政治のあり方も変わつてくる。したがつてこういふこといいのかという、そういう疑問も出てくることは必定で、一体どういう人物がリーダーであるべきなのか、カリフとは一体どういう資

の表明という形式を踏むのですね。ニーハヤというのは直訳すればインテンション（意図）ということです。「自分はこれから喜捨をします」「自分はこれから断食をします」と、その意図をわざわざ口に出して言わせるわけです。逆に言えば、少なくともその時だけ本気にアッラーのことを考えれば、あとは形式的にやついていてもかまわないということになる。ですからそのニーハヤをオミットしちゃうと、その行為は無効になるわけですね。ということは、たて前は別にして、イスラム 자체「聖」なる規範の「俗」化を認めているわけですね。実際、シャリーアの実践の際、常に神のことばかり考えていることは普通の人間では現実には無理なのです。そういう意味ではシャリーアは常に形式化し、ルーティン（日常）化してしまいますね。それは何も相続だと婚姻だと俗化していくわけです。それは何も相続だと婚姻だと通の人間では現実には無理なのです。そういう意味でカ、そういう手続きがルーティン化するというだけではなくて、巡礼、喜捨、断食も含めて、放つておけばルーティン化してしまいますね。ルーティン化するということは俗化することなんですね。ですからそれに何とか歯止めをかけ、ケガれたものを再活性化、再聖化しないかと思うのです。

そのことは、また同時に「法」という側面でいうと、シャリーアという神の法を適用するという前提に立ちながら、実際に存在している国家において、その法を施行していく段階では、別のレベルでの法の制定にあたる法令を作つて実行するという、そういう必要性も国家の展開の中で当然出てくるわけですね。コーランとかハディースがあるのだからそれでいいんだということでは済ませられない。何らかの規則を国家が作つていくという、そういうことも当然出てくるわけですね。

そうなるとカーヌーンという、——これはシャリーア

の方から考えれば、あくまでもシャリーアを適用するまでの施行細則というか、実際にシャリーアを実現するためのレギュレーション（規則）として正当化される——そういうようなものが必要となってくる。だが、しばしば、ことに第三者の目で見ると、シャリーアは聖なる法で、カーヌーンは世俗法という、またもやここで「聖」と「俗」の問題に戻るわけですけれども、そういうふうな図式で見えるような実態が立ち現れるわけです。

そこで、たえずシャリーアの絶対性という問題に置き換える直そう、解釈し直そうという、そういう力が働いてはいますけれども、しかしやっぱりシャリーアとカーヌーンという、そういう間の関係の問題というのが避けがたく出てくる。こういうことがオスマン帝国などの中ではもうすでに起こつてくるわけですね。

ですからイスラムの歴史の中で、宗教と政治というのが完全に一体化して動いていた、それが近代になつてそうではなくたとか、それをもう一回一致させようというのがいわゆるイスラム革命だという、そういうふうな単純な理解ではいかないわけですね。

さつき中村さんが言われたように、スルターンとかアミールとか、そういうある種の軍事力の体現者が現実に政治権力の担い手であったこともあるでしょう。それはまたカリフの宗教的権威によって保証されるという、文字通り俗的な権力が宗教によって意義づけられる。そういうダイナミズムがイスラムの歴史を通じてあるわけです。

中村 そういう意味では「聖」と「俗」の間にはたえず緊張関係にあつて、ダイナミックな構成をもつてていると思います。近現代においてよくイスラム国家を作らなければならぬといふことが政治の中で言われます。しかし、イスラム国家とは、そもそも一体何かとなると、それがまたはつきりしませんね。イスラム共和国とは何かということははつきりしない。パキスタンが分離独立した時、パキスタンはイスラム国家である、イスラム共和国であると言われましたが、それは具体的に何だと言つてもなかなかはつきりしない。同じイスラム共和国でも、イランの場合とも違う。そもそもイスラム国家という場合、それは過去のイスラム世界、特に最初期のイスラム国家ですから、答えが一義的に出てこないのは当たり前なんですね。

ラムの国家をモデルにしていると思われますが、今日でいう国家とは、ヨーロッパでも絶対王政以降のものです。つまり一定の領域と主権をもつた国民国家というようなものは、ごく最近の概念なんですね。ですからそういう意味の国家をイスラム的にしたものとしてのイスラム国家ですから、答えが一義的に出てこないのは当たり前なんですね。

これは私の意見ですが、もともとイスラムというのは本来決して政治的な現象でもないし、また経済的な現象でもない。では何であるかといふとやつぱり宗教なんですね。確かに経済とか政治とか、そういうものに関係するようなことをコーランの中でも述べられていました、あるいはそういうことについて預言者が語ったというようなことはあるにしても、それは決して政治学者としてそういうことを言つてはいるわけではないのか。ただ今日の世俗化した社会にいる私たちからみれば、預言者は「宗教者」であり、「政治家」でもあつたというように区別されるにすぎないのではないか。ですからシャリーアと

いうのも、私たちが今日考へているような意味でのいわゆる法律ではない。近代的な法、つまり実定法として考へれば、理解できないようなことがいくらでもあるわけですね。そもそもシャリーアといふのは道徳的義務論である、と言つたのはH・A・R・ギブですが、私もそうだと思いますね。

板垣 しかしやっぱり、シャリーアに基づいてウラマーが解釈し判断するという、実際の裁判とか、そういう場面を考えても、シャリーアといふものが一つの社会の中で意味づけられてきた、ずっとある種の一貫性をもつて意味づけられてきたという、そういうことがあつたと観念されている。そういう約束がなんとか働いていた時代に対して、そういう約束そのものがあつて空しくなり、働くなくなってしまう、近代ですね。その違いはあると思います。

それは、イスラム圏の人々にとつては、全く性質の違う法律を盾にとつて、イスラム法の裁判官とは違う裁判官が裁定を行なう裁判所ができる、そしてシャリーアの根幹に関わるような、シャリーアと矛盾した判定が下さ

れる。それが力をもつて実施される、押しつけられるというような、そういう局面が近代になって表面化してくる。そつするとこれは今さつき中村さんが言っていたような意味での宗教理念としてのシャリーアというようなこと、それからそれは政治とか経済とかとはまた別なんだという、そういうことではなしに、もつと統合的に政治も経済も、そして人生万般、社会のありとあらゆることに貫徹すべきはずであったところのシャリーアが成り立たなくなつたという、そういう認識が否応なく出てくる、そういう時代がやつてきたということでしょうね。

中村 ただその認識がはたして正当であるかどうかといふことは別だろうと思いますが……。

板垣 政治でもない経済でもない、やっぱりあれは宗教だというふうなことではなくて……。

中村 もちろん私が言うのは、政治も経済も含んだという意味での、つまりそれらを包んでいる宗教だという意味です。

板垣 政治は政治、経済は経済というふうにして分離して考える考え方にはイスラムにはない。

中村 ですから政治を含んでいるというよりも、むしろそれともダブルと言つた方がいいかれしれないですね、経済の領域ともダブル……。

板垣 僕はふだんイスラムは「問題分割に反対する」というように説明している。

中村 私が言いたいのは、これがイスラム国家である、これがイスラム経済であるというように明確な実体として固定した国家や経済があるわけではないということです。これはムスリムが様々な状況の中で考えるべきもので、その結果がイスラム経済であり、イスラム国家であるとして出てくるのであって、何かアприオリな原理、具体的なものとしてあるというものではない。ですから過去にイスラム国家があつたとしても、それが現代の二十世紀の国民国家の中でそのまま適用できるかどうかといふのはまた別ですし、それが様々な形態をとっても何ら不思議ではありません。ですけれどもそういうことを求めさせるものをイスラムが持つてきましたことは事実だと思いますね。同時にそれはイスラムだけの問題ではなくて、歴史的背景の問題も含んでくると思うんです

## けどね。

### 五、新たな世界秩序を求めて

板垣 認識の当否は別として、また好むと好まざるとにかかわらず、現実の問題として、イスラム的な国家というものをもう一度取り戻そうという、そういう考えでいろいろな運動が起つてきてる。それでは現に、今我々の身の回りで、二十世紀末の今日の世界の中で、「イスラム国家」というのは一体どういうふうにして存在しだと言えるのかということになつていくと、この「イスラム国家」の定義はとたんに非常に曖昧になる。実際にそれに具体的な中身を与えるところで、みんな苦労しているのだと思います。

イスラム国家とは何だといえば、結局はシャリーアの実践において善を勧め悪を禁じる、そういう国家なんだということにしかならない。じゃあ一体、善を勧め悪を禁ずると言つても、どうすればそういうことになるといえるのかという点では、またいろいろ意見が分かれてしまつた

まう。現代世界の中で普遍的に確認されうるような基準としてなかなか説明できないという、そういう問題があるわけです。

だから例えばイスラム的経済と言つても、それはかねにかねを生ませる利子生み活動をしない銀行というものにむかって金融制度を改革し、経済活動におけるパートナーシップの貫徹を実現して、不労所得をふせぎ、人間的充実・尊厳を回復していかなければいけないと、あるいは、ザカート（喜捨）を精密にデザインされた福祉目的税の体系としてもつとしつかりした今日の制度として固め直す、そういうことによつて社会的公正とか平等・衡平とか福祉とか、そういうことを保証できる体制をつくるなければいけないとか、そうしたいくつかの個別的次元では、いろいろな実験が試みられ、するどい問題提起が行なわれているけれども、しかし現在の世界経済の中にイスラム経済なるものはどのようにセットできるのかということになると、包括的な普遍的な理論的見通しが立てにくいわけですね。

現状批判の議論はあつても、何か新しい建設的方向、

例えば新世界秩序をつくるというような議論にならなか  
つながらない、そういう問題がある。

中村 今のイランもイスラム国家といえば一つのイスラム国家になるわけですね。パキスタンもイスラム国家であるといえばイスラム国家になるかもしれない。しかし、それは要するに、共産主義国家、「理想とする共産主義社会に移行する段階にある」ものを含めてそう呼ぶとすれば、中国はそうだったわけですね。それからソ連も崩壊しましたけれどもそうだった、北朝鮮などとも……。しかし、それは一つの途上にあるものとして、理想としての国家を完全に実現しているということではないですね。そういう意味でのイスラム国家なら現実のもとのしてあると思うんですね。しかし、では理想とするイスラム国家とは何であるかとなると、答えを出すのはなかなか難しいんじゃないかなと思いますが。

板垣 今たしかにイスラム諸国会議という国際機構もあって、自らイスラム国家であることを名乗る国々はある。なんとなればムスリムが人口の面で圧倒的多数を占める国だからというよなことでイスラム国であること

その原点復帰をなし遂げようという、そういう主張なんでしょうね。

中村 「聖」なるものにつき動かされる夢、そういう意味での夢ですね。その人にとっては自らをも犠牲にできるよう、そういう意味での夢ですね。

板垣 イスラムの立場からそのような夢や「理想」について発言しようとする人たちが実際にはどう考えているのかといふ、その次元のことは脇において、僕自身の意見を言いますと、僕は西暦七世紀、メディナにおいて成立したウンマは——アラビア語でウンマという言葉は、今日の世界の中で一般に国民や民族を意味するものとして使われていますけれども——それにひっかけて言うわけではありませんが、やっぱりある一つの国民国家が成立したことだったのだというふうに考えたらどうかと思うんですね。

社会科学の常識からすれば、ずいぶん突飛な考え方だと思われるに違いないわけですけれども……。国民国家とか市民社会のシステムというのは近代のヨーロッパにおいて成立してきたものであって、またそうした諸國家

を名乗っているわけです。

ただ今日の世界の中でイスラムを復興しよう、イスラムの精神を現代に生かし直そう、そしてイスラムの原点を再確立しようという、そういうことを考えている人たちの立場からすれば、イスラム諸国会議などを構成している国々はいずれもイスラム性において著しく問題がある、ということになる。そういう現状を内側から変えて、真のイスラム性を再獲得しなければいけない、そういう批判をつけたことになるわけですね。

中村 その場合は、イスラム性というのが一つの超越的な理想として、あるいはユートピアとして非常に美化されて、それとの対比によって現状を批判するという、そこに大きなインパクトが出てくるわけですね。

板垣 ただその理想を単なる夢想である、ユートピアだというふうに考えるのではなく、ある人々はそれが西暦七世紀のメディナにはあったはずだと確信する、そしてそこを原点にして、そこへ立ち戻ろう、それもただ簡単にタイムマシンに乗って舞い戻るというのではなくて、あくまでも二十世紀末の今日的 세계의 現実の中において

体系としての国際社会というようなものも、それはやっぱり十七世紀から後の問題だという図式に沿って、あくまでヨーロッパの近代的発展の中でこそ国民国家、ネーションステイトの成立と展開、あるいは拡大があつた、そういう議論を今までやつてきたわけですね。

しかし考えてみると、これまでたえずヨーロッパになげて理解されてきた近代的な原理、例えば市民の共同社会のあり方とか、ある種のネーションに基づく政治社会の成立とか、それから都市的な人間のあり方、言い換えば個人主義とか合理主義とか普遍主義とかいう、そういう近代的原理というのは、やっぱりイスラムのウンマの成立というところから考え出してみると、いうことができるし、またあらためて考え出してみなければならぬのではないか、と思うのです。

ですから、西暦七世紀、メディナで成立した政治社会というものを、現代のムスリムたちにとって「聖」なるものにつながる目標というか夢というか、そういうものとしてとらえる動きとは別に、七世紀から始まつた近代化、つまり近代的な政治社会の原理の生成の出発点と考

えてもいいのではないですか。その生成と発展がやがて

ヨーロッパなどをも巻き込みながら、もつとも途中からは（大体十九世紀以降）ヨーロッパこそが中心みたいな話にすりかわったりもしたけれども、この近代化の巨大な歴史的流れが今日にずっと及んできている。そして、その墮落形態や頽廃現象が現代のいわゆるイスラム諸国をも含めた現代世界全体に、日本国家も含めて表れてきている。そうした七世紀以来の「近代」のある黄昏ということになっているのではないか。

だからムスリムたちの中で今イスラムの復興とか原点回帰とか、本来のイスラム国家とは何かという、そういうことが考え直され模索されている、そこでの思索や社会的実験をもう一段普遍化できれば、それはただちに現代世界の人類全体に対する一つの問題提起としての意味をもち得るのではないか、そういうことを考えています。それは、イスラムにおける聖と俗について中村さんが大変複雑な問題を整理して話された、そういうことと関係ありますけれども、やっぱりある種の統合的な理解、世界・宇宙の統合的な理解ということと関係してくる面

があると思います。

ことに、先程言ったように「近代」的原理の理解が途中からヨーロッパをあたかも中心にみたてて一人歩きしはじめてしまうような段階で、政治と宗教というものは別々であるべきだ、政教分離とか、教会と国家の分離とか、そういう一項対立的な分離をすることこそが善だという考え方が生まれてきて、二十世紀末の今日、依然として尾を引いています。しかしそういうことが本当にいいというのはどうして言えることなのかをよく考え直してみる必要がある。政治社会、あるいは国民国家のこれまでの展開の中で、政治と宗教の分離にこだわるのではなく、むしろそれぞれの原点に立ち戻って見直す統合的な世界観を模索しなければならないのではないか。

政治も経済も社会も、それらがバラバラになっていて、しかもそれらが人間が生きていくことの最も原則的な基本的な問題と何か離れたところで動いているという現実に対しても、やっぱり今世界中の人々が、ムスリムたちだけではなくだれもが、ある統合的なものの考え方、とらえ方を求め直している局面があるようだと思っています。

それは個人と社会とか、人間と自然とか、あらゆる問題局面に拡がつていって、だからそれこそ環境とか生態系とか、そういう問題についてみんなが考え出すようになつていても、こうした統合的な見方なり全体性の回復というか、そもそも人間としての統合性の回復への要求と関わっているといふべきでしよう。

こういうふうに考えてみると、現在のイスラム復興運動については、ムスリムたち自身がどう考へているかは別にして、むしろ我々自身の方としては、そこに含まれている普遍的な意味とか問題提起というものを、我々の側から積極的に読み取っていく、そういうことが必要なではないか、そういうふうに思われるのです。

中村 たしかにルネッサンス、それから科学革命、産業革命を通してヨーロッパが世界を制覇するようになります、その背景には西洋近代科学というのがあるわけです。西洋近代科学というのは要するにデカルト的にモノ（物質）と心（精神）を分離して、モノをモノとして、つまり人間が観察できる、心と分離された機械として観察し分析し、そして法則化していく。そういうようにし

て出てきた近代文明が、今たしかに危機に直面している

ということは事実ですね。もう地球そのものがどうなるか分からぬといわれる。その一つの背景はやはりモノと心を分離する分析的思考の行き詰まりがあると思いますね。分析し、限りなく細分化してバラバラにしたものもう一度寄せ集めて全体を知ろうとするわけですがれども、しかしバラバラにしたものを見せ集めただけでは全体はとらえられないということがわかつて来たのですね。実際に人間の体には、足があり手があり心臓がありますね。胃腸があり、脳があり精神（心）があります。ところが心臓や胃が悪いからといって心臓や胃だけを見る、心とは全く切り離された形で心臓や胃だけを見る。実は心の病気、精神的ストレスに起因していることがありますね。これまでの近代医学がもつっていた一つの欠陥ということになりますが、最近その点が反省されてきていますね。

板垣 心臓死か脳死などというのも、これは人間をバラバラにする議論ですね。

中村 そうですね。死んだものはモノである、だから

それを切り離してどこへ持つて行こうが関係ないという考え方。そういう考え方とデカルト的二元論はどこかでつながっているかもしれませんね。しかしながら、そういう動きに対しては最近反省が出てきています。やはりもう少し総合的に見なければならぬ、部分だけ見るのでではなくて、また部分の寄せ集めとしての全体というのではなくて、環境全体、そしてその中に暮らしている人間、そして人間とその環境とが一つのトータルなシステムの中にあるというような総合的な見方が必要になつてくる。それは人間の心臓が一つの器官であり、それが人間全体と相互に関係していると見ると同じですね。それは心も肉体も相互に関係している、そういうように一つの総合体として見なければいけないという考え方がある。だからそういう意味では総合的な視点を回復するうえでイスラムは一つのヒントを出しているのではないか——先程の板垣さんの話を私なりにそのように理解したのですけれどね。もつとも、ヨーロッパ近代文明は終わりだから次はイスラムという、そういう短絡的な議論がよくあります。

中村 大変な問題提起だと思いますね。

(いたがき ゆうぞう・東京大学名誉教授)  
(なかむら こうじろう・東京大学教授)

ありとあらゆるもののが個別性をたゆみなく枚挙していくて、その上ですべてが最終的には「一」であるところの究極的な神の存在につながるものとして理解するといふ、気の遠くなるような個別性・多様性・多元性を統合していく考え方にはだわり、それを気にし続けてきたということが認められるだろうと思います。

そのようにしてイスラムがこだわり続けて立場の見直しは、近代西洋のあり方の再検討をも含めて、今新しい問題提起になり得るようではないか。

ますが、そういう意味ではないですね。今までヨーロッパ中心であったが、今度は別の方に中心が動いたというだけではない……。

板垣 僕が言いたいのは、むしろ西欧というのは実はイスラムにまつわりついていて、いわばその延長線上にある問題だということです。だからイスラムも近代西欧もみんな何か共倒れというか、そういうことが七世紀からずっと二十世紀までの歴史を経過してくる中で結果としてでてきてるのだと思います。西洋の近代的原理とは別のところに、その外側に、イスラムがあるという、そういう理解の仕方こそ考え直す必要があると思う。

ただ西欧の方はあるところから急にキリキリと理屈だけが先に進んでしまった。「分法的な、分断的・分析的な問題分割」という方向にどんどん進んだ。それに比べるとイスラムの方は、やがてヨーロッパ流の「二つの世界」論、東・西対立論にいやおうなく引きずられるようになってきた面はあるけれども、しかし個物とか個人とかいふ、それから最初のあたりで出た話題で言えば、人間の行為の個々の局面とか、時間の一節一節とか、そういう